

■大谷中学・報恩講
「いのちまるごと認める世界」
真城義麿校長
2010年11月22日

本日は、本校が創立されて以来百三十五年の歴史の中で、ずっと欠かすことなく毎年毎年のととても大切な行事としてとり行われてきた報恩講という行事です。ちょうど昨日から東本願寺でも二十八日まで七昼夜の報恩講という行事が勤まっております。また、あちこちの親鸞聖人の教えの流れをくむ様々なお寺は、一つの例外もなく報恩講のお勤めをします。ですから大谷という学校はどういう学校かというと、ひとつは報恩講をお勤めする学校である、そう言ってもいいかもしれません。

報恩の「恩」というのは、上半分に原因の「因」という字がありますね。君たちがここに生きているということが成り立つためには、本当に地球が始まって以来の、もっと言えば宇宙が始まって以来の様々な歴史が全部原因となって、そしてたまたま今日の報恩講のこの瞬間というのが成り立っている。それは簡単にあれとあれとあれというふうに、言葉で説明が付きません。ありとあらゆるもの全てが因となっているのです。そして「因」という字の下に「心」という字がありまして、その因を心で受け止めようと、そういうふうに、私は恩という字を見ると感じます。元々の言葉は、インドの言葉で「カタンニュー」という言葉を翻訳したものです。カタンというのは、「私のためにしてくれたことを」という意味です。ニューという言葉は、英語の know の祖先の言葉で「知る」という意味ですね。ですから、カタンニューは「私のためにしてくれたことをきちんと知る」という意味です。

君たちが今ここに座るといふこと、あるいは今日までのいのち長らえて生きてきたということ、これは本当に奇跡のようなことですね。いろんな様々なものがそのことを支えている。そのようなあらゆる関係の中で、私たちが成り立っている。そして私たちは常に大事にされているということです。誰からかということ、仏様から。いつでも、どこにいても、仏様から大事にされているという大きな安心感を持って、どんな状態になってもそこで絶望せずに生きていける。そういう教え、そういう世界を見つけて、私たちに教えてくださっているのが親鸞聖人という方です。

親鸞聖人という方は、承安三年、一一七三年の春にお生まれになられた。平安時代の終わり頃、ちょうど源平合戦が起こる頃です。長い人生を送られまして、その当時の平均寿命で言えば二・五倍ぐらいじゃないかと思いますが、数え年の九十歳まで、つまり一二六二年、弘長二年という年まで生きられました。そして、いのちを終えていかれたのが十一月二十八日です。その十一月二十八日の少し手前のところで、本校は報恩講をお勤めしているわけです。

さて、その親鸞聖人の人生というのは、二十九歳まで本当にひたむきに一生懸命求めて、学んで、修行してということをや誰よりも真剣に真摯に取り組まれました。親鸞聖人は、幼い頃にお父さんがいなくなり、お母さんが亡くなってしまわれて、親戚の家に預けられます。そういう幼年時代を過ごすわけですね。それで数え年の九歳、満年齢で言えば八歳になるかならないかの時に、お寺に預けられるんですね。それから二十年間、比叡山を中心にして、先ほど言いましたように仏教を知恵の限りを尽くして勉強し、肉体の限りを尽く

してお経を読み、精神を集中し、様々な修行をなさった。

君たちがちょっと想像がつかないような、人間にこんなことができるんだろうかと思うような様々な修行が、比叡山にはあります。聞いたことがあるかと思いますが、例えば十二年ろうざん籠山という、一旦修行を始めると十二年間は山から出てこない。そのうちの七年を、千日回峯行かいほうぎょうと言って、千日かかって四万キロ歩くんです。一番最初は一日三〇キロ位ですが、終わりの方になると一日八〇キロぐらい歩く。午前一時ぐらいに出発して十時までかかるんですね。その千日の途中にお不動堂へのお籠りこもりというのがあって、この時は九日間、飲まず食わず眠らず横にならずです。六日目、七日目になると、唇に粉がふいてきて真っ白になって、瞳孔反応もなくなります。よく、この人は生きているのか死んでいるのかという時に、お医者様が懐中電灯で目を照らしてみても、瞳孔反応があると生きているということになるんですが、人間は極限状態になると瞳孔反応がなくなり、開きっぱなしになる。そういう時はとても危険で、もしその人の写真を撮ってやろうと、カメラのフラッシュをたくと網膜が焼けてしまうという状態なんですね。それから、体は皮膚の表面から腐り始めて、死体のような臭いがしてくる。日に一回、阿伽井という井戸までお不動さんの水を交換にいくんだけど、それも一歩を歩くのも大変というような状態になる。

その修行を親鸞聖人が実際にやられたという記録はありませんが、そういうことをはじめとする様々な修行というものに挑戦されたに違いない。そうこうする間に、またたく間に二十年が経って、知恵も精神も肉体も、これ以上できないという、自分というものの全部を費やして一生懸命やった。だけど行き詰ってしまった。

これはちょうど現代社会が、世の中を全部人間の知恵で何とかしようとすればするほど、行き詰ってしまうということと重なると思いますね。そこで親鸞聖人は、二十九歳の時にひとつの大きな方向転換をされるわけです。それは聖徳太子という方をお祀りまつしている六角堂にお参りをし、そこでひとつのヒントをもらって、法然上人のところへ訪ねていった。法然上人という人は、やはり比叡山で学問修行された方ですが、それまでの仏教の考え方や進み方に疑問をもたれ、どんな人も分け隔て無く救われる教えを求め続けられました。そしてついに阿弥陀仏という仏様の本願とそのはたらきによって、信じて仏様の名前を呼ぶ人が無差別無条件に救われる道を見つけて、すでに親鸞聖人よりも早く比叡山から降りて、街の中で人々にその教えを説いておられました。関白九条兼実のような社会の最上位にいる人から、名前もつけてもらったんだろうかというような生活をしている人たちまでが、法然上人のところへ教えを聞きに集まりました。本当に法然上人の教えを聞かずにはいられないという人たちがたくさん集まっている、そこへ親鸞聖人も行かれたわけです。

あまり大きな話題にはなりません、その当時法然上人のところへ話を聞きに来られている人たちの中には、侍がたくさんいました。有名な人としては、『平家物語』の敦盛あつもりに出てくる熊谷次郎直実くまがい なおざねですね。一ノ谷の合戦で平家の軍勢と戦うわけですが、組みふせて首をはねようとかぶとを取って、顔を見て名乗らせる。そうすると平敦盛と答えるわけです。

愛する我が子と同年齢の十六歳。この人の首を刎ねなければならないのかと思うと、とてもじゃないけど、刀に力が入らない。しかし、やむを得ず泣く泣く首を刎ねる。伝説によると、自分の子供を身代りにして逃がしたという伝説もありますが、とにかく首を刎ねる。熊谷次郎直実は、死ぬまで自分の手の中に若武者を殺した手応えというのを持って生きていかなければならない。夜寝ていてうなされるかもしれない。人間を殺すという一番罪の重いことをしたわけですから、死んでから後は極楽へ行けるなんてあり得ない。地獄へ落ちて、生きている時よりももっとひどい苦しみにあわなければならない。日本では、百年ぐらい前から地獄というイメージがなくなりましたが、生きていてどんな辛くても死んでから地獄へ行くよりはマシという感覚が、それまでの日本にはあったと思います。そういう侍たちが法然上人のところへ行くと、そのように自分の行いをしっかりと見つめて、そして悔い、後悔し、亡き人を悲しみ、自分の生き方に悩んでいる人、そういう人こそが仏様から真っ先に救われる人なんだという教えですから、たくさんの人たちがそこへ来るわけです。

身分の上下も財産も一切関係なしに、どの人もすべて平等に尊いという教えです。しかしそれは、世の中を治める人たちや、親鸞聖人がそれまでががんばっていた比叡山のような、がんばって成果をあげたらその成果にふさわしい位が与えられたり、大きなお寺に住む権利が与えられたりという成果主義ですね、そういう発想でがんばっている人たちからしたら、そういうことがあろうがなかろうが、みんな平等に救われるんだという教えは困る。そういうことで大弾圧を受けるわけですね。四人の人たちが首を切られます。有名な人で住蓮という人と安楽という人たちですが、この人たちも侍ですね。

それはちょっと置いておいて、親鸞聖人は、その法然上人のところへ行って、ここに自分の本当に求めているものがあつたと感動して弟子に加わるわけです。自分の能力とか成果とかを一切問わない。今まで「私が、この自分の持っている力で」と思っていたのが、そうではなかった。主語は仏様だった。仏様がこの私のために、私に対して存在そのものを、いのち丸ごと何の条件もつけずに、あなたはあなたとして尊いのであるというふうに認めてくれている。私は私でそれでいい、あなたの人生には意味がある。どんな状態になってもあなたの人生には意味があり、価値があり、その人生は必要とされている。そういう教えです。

そして、法然上人はそのことをただ口で言っているだけではなくて、法然上人の朝から晩まで生きている姿全部が、その法然上人が信じていること、^{おっしゃ}仰っていることと全く何の違和感もない、全くそのままである。そのことに触れて、親鸞聖人はここに自分の求めている世界があるということで、その教えをさらに深めていかれました。基本的なところで大きく安心して、その上で自分に与えられた環境・条件・能力の中で、できることを惜しまずやらせていただくという世界が開かれてきたわけですね。

今の世の中は、私たちはどんな状態になっても心配ないよというものをどこかに置き忘れてきたために、何かを失敗すると後がない。何かでうまくいかないと自分の人生は終わ

りだと、そんなふうになってしまって、残念ながら日本は世界の中でも自殺をされる方、自分で自分のいのちを終えていくという選択肢しかなくなっていくところまで追い詰められていく人たちの割合は、世界でもトップクラスになってしまっている。日本では、平成三年頃までは、自殺・自死される方の数は年間に一万八千人ぐらいだったんですが、平成四年に一万九千人になり、平成五年に二万人を超え、平成十年に三万人を超えて以来、昨年まで十二年間一度も三万人を切ったことがない。去年は、三万二千八百人ほど亡くなっているわけです。今、十万人あたり何人自殺されたかという自殺率で言えば、日本よりも自殺の率が高いのは、リトアニアとベラルーシと、カザフスタンとロシアとハンガリーと、この五つしかないんですね。アメリカの倍ぐらいです。ヨーロッパの平均の三倍ぐらいの率です。また、行き詰って引きこもる人たちが全世代を合わせると百万人ぐらい、今日本にはいます。たくさんの人たちが行き詰って、生きていくことが苦しくて、生き辛いと思っている人たちがたくさん、たくさんいる世の中になってしまっています。

先週、まだ一週間も経たないんですが、大谷の卒業生で、昔僕が担任した生徒ですけれども、東北地方で今生活をしているんですが、わざわざ交通費を使って、ホテルも取って、真城先生、どうしても話を聞いてほしいとたずねてきた人がいて、話を聞かせてもらったんです。それは、自分と同期で、同じ年に入社した同僚が自殺をしてしまった。ある日、出勤してこなかったのが、皆で大騒ぎして捜すんですが、一週間後にずいぶん離れたところで硫化水素自殺をしてしまっていた。北海道出身の人だったので、親のところまで弔問をしたり、色々考えたり悩んだり苦しんだという事でした。

その同僚と自分は、ほぼ同じような経験をしているんだけど、自分は大谷という学校で身につけた何かがあったと思う。いろんな時に、そこへ戻って考えたり、そこへ戻ってたずねたり、あるいは昔の『樹心集』を出してきて読んだり、あるいはそれに触発されているような仏教の本を買ってきて読んだり、あるいは大谷のホームページを見たりすることで、今日の目の前の仕事では失敗して、それに対して叱られもする、ペナルティも与えられる、場合によってはクビになるかもしれない。だけど、自分は人間としては否定される必要はない。自分で自分が生きているということを否定する必要はない。自分は人間としては、ちゃんと大事な意味のある人生を送っているんだということを自分は思える。だけど、彼がそういうことなしに、ああなってしまったということで、自分がもっといろんなことでフォロー出来ればよかったのにみたいなことを、ある店で四時間くらい話を聞いていました。そういう、どんな状態になったって絶望しなくてもいいという世界があるし、今現にそこにいるんです。だけれども、それを自分の知恵や能力だけで解決していこうとすると、どうしたって行き詰ってしまう。

そんなことで今日は、大谷中学校の先輩で、本当に自分だったらここまで辛い状況が起こっても生きていけるかなというような経験をされた先輩がいます。その先輩は、大谷中学校を卒業した後、大谷高校には進学せずに、呉竹養護学校の方に行きました。大谷中学校も四年かかって卒業したわけですが、小野伯幸さんという方です。昭和四十二年生

まれですから、今四十二、三歳です。名古屋で生まれたんですが、お父さんの転勤とかがあって、小学校三年生の時に京都に引っ越してきて、大谷中学校を受験して入学するわけですね。小学校六年生の時に突然頭が痛くなって病院に行くんだけど、大したことはないでしょうと言われて、その時は治療も何もしなかった。昭和五十五年に大谷中学に入学するんですが、大谷中学に入学してから何の症状もなくて元気でやっていたんです。ところが、一学期の終わり頃に激痛が始まるんですね。

そこの第一日赤、赤十字病院で診てもらったら脳腫瘍ということが分かる。頭の中に腫瘍が二つできている。先生が仰るには、手術を三回しなければならない。頭を切って手術をするわけですよ。一回は、一つ目の腫瘍を取る。二回目は二つ目の腫瘍を取る。三回目はその腫瘍を取った後にバイパスという迂回路、血管の迂回路を作る手術をしなければならない。もしこの手術をしなければ、あと三カ月しかいのちはない。もし手術をした時に手術の成功率は3%、97%は手術をしてもうまくいかないだろうという手術ですね。随分、家族で悩むんですが、結局手術を受けるんです。するとそこで奇跡が起こって、3%しか成功しないだろうという手術は、手術そのものは成功するわけです。だけど、手術のことで頭がいっぱいだったんだけど、手術が終わってみると、今度は猛烈な後遺症がいっぱい出てくるわけです。当分の間は後遺症があるけれども、段々良くなっていく後遺症と、死ぬまで付き合っていかなければならない後遺症と二種類あるわけです。

最初の、次第に少しずつ軽くなるけど最初が大変な後遺症は、記憶力の低下といって、今日あったことをすぐ覚えるということができない。例えば、病院に入院している。お見舞いに来てくれる。その時は、その人と分かって話している。じゃあお大事にねと言って帰って行って、お母さんがさっき誰が来ていたのと聞くと、もう忘れている。誰か覚えることができないという状態ですね。だから、毎日、看護婦さんが朝、最初に来た時に、「伯幸君、今日は何月何日？」と聞くんだそうなんですが、それが覚えられなくて答えられない。これが記憶力の低下というものです。それから、墜落睡眠みたいに、突然、猛烈な睡魔が襲ってきて、何をしている最中でも寝てしまうんですね。学校に通学するバスの中で寝てしまって、終点で起こされるということもあった。

それから、大変なのは、体温を調節する能力がなくなってしまって、その当時、大谷中高校全部合わせても、クーラーのついている部屋はたった一部屋しかなかった。それは校長室ではなくて、印刷室ひとつだけ。機械のためにクーラーがついていたんですが、そういう部屋がひとつだけあった。夏なんかは、気温が上がってくると、伯幸君の体温も一緒になって上がっていくわけです。そうすると、大変になりますからクーラーの部屋へ運んで、冷やす。あるいは体中に氷枕をくっつけて冷やす。あるいはアルコールで拭いて、アルコールの気化熱で冷やす。いろんなことをして冷やすということをして、逆に気温が下がっていくと、あっという間にガタガタ震え始めてしまう。そんなようなこと。これは汗を出すということができなくなってしまっていた。これは、その後少しずつ回復して、段々、汗を出す力というか、能力が回復してきて、少し体温調整についてはできるように

なった。その他にも視力が落ちたり、味覚が、甘いとか^{から}辛いとか味わう能力、これは少しずつ回復している。

もうひとつ、死ぬまでつき合っていかななくてはならない副作用がありました。それはホルモンをちゃんと出すことができなくなった。だから、常にホルモンを注射とか薬とかで補い続けなければならない。甲状腺ホルモンとか、副腎皮質ホルモンとかを薬で補います。そうすると、その副作用で顔がむくんだり、体重が増えたりとか、そんなようなことになる。それから尿放症と言って、普通の人の三倍、四倍ぐらいおしっこが出てしまう。体の水分がほとんどおしっこになって体の外に出てしまうんです。だから、放っておけばすぐに脱水症状になって、これもちが危ない。意識がなくなってしまうんですね。それで、これを防ぐ薬を飲むと同時に、常に水分を補っていかなければならない。それから、右足が麻痺する。そんな後遺症が残った。

けれども、できる範囲で学校にもいて、いられる範囲で教室にいて四年かけて大谷中学を卒業して、そして呉竹養護学校に行くんですね。そこに行って、世の中にはいろんな障害を持って大変な人たちがいっぱいいるんだということに彼は出会って、二年生三年生になったら、自分のできる範囲で、もっと障害の重い人たちのお手伝いをしたり、そういう生活が始まるわけです。それで、そういう養護学校に行くと、この前も大谷でも車椅子バスケットのチームに来てもらって、高校一年生の体験学習があったんですが、いろんな障害の人ができるスポーツの形態があります。本人の言葉によると「体育の授業ではバギーに乗って身動きが取れない人、車椅子をこげる人、歩ける人、走る人の皆が楽しめるような工夫されたバレーボール、ハンドベースボールがあり、初めて体験するスポーツばかりでした。自分でもできるなんて今まで考えられないことでした」。というようなことで新しい世界を発見して、自分もいっぱい障害を持っているけれども、何か人の役に立って生きていきたいということで、手足のない人の義足とか義手を作る、そういう技術の専門学校に行くわけですね。

だけど、結局そういう就職はできなくて違うところで就職をするんですが、ちょうどその頃にお父さんとお母さんの人間関係や様々なことがうまくいかなくなって離婚されるわけですね。それから、お母さんと一緒に二人暮らしになるんですね。そういういろんな精神的なことがあると症状が重くなって、それからしばらくは電動車いすの生活になります。お母さんの仕事が大変な時には、当分の間一人で生活をする。電動車いすなんだけど、雨が降ったら外へ行けないので、例えば三日雨が降ると、三日食べていないとか、そういうようなこととか、あるいは雨が降ってぬかるんでいるということを気がつかないまま外に出て、溝にはまって、彼の弁によると、「夜中に雨が降ったのに気付かずいつものように買い物にでかけ、ぬかるみにタイヤがはまって、五メートル下の河原に転落し、二時間ほど経ってやっと見つけてもらえた時など、何度も救急車のお世話になりました」。

そうこうしている内に脳腫瘍が再発するんですね。そんなようなことがありながら、また再発した脳腫瘍は治療がうまくいくんですね。だけど、今度は血糖値という血液の中の

糖分の値が標準の人が100ぐらいだとすると、この人は800ぐらいになってしまって、ちょうどその頃に本人と出会ったことがありましたが、朝昼晩、自分の体の一部を傷つけて血を出して、その場で血糖値を計って、それに合わせた注射を一日三回、打つわけです。ですから、インシュリン注射というのですが、僕がその当時に会った時も、注射を打つ場所が段々なくなってきていて、皮膚がカチカチになったりしていました。だけど、彼はそこでも気を取り直して、一生懸命がんばるんですね。

障害者としてスポーツもできるという世界にも気付きましたので、平成九年の大阪長居で行われた第33回全国身体障害者スポーツ大会、「ふれあいピック大阪」に砲丸投げとソフトボール投げに出場して、金メダルを取るわけですね。彼はもう一度平成十八年にも金メダルを取っているわけです。砲丸投げとソフトボール投げです。彼に会うと、この四つのメダルが自分には最高の宝物ですと、今でも言ってくれます。

今は三重県の鈴鹿というところで生活をしています。そののちに彼は、がんばって障害を持ちながら、三級ヘルパーという資格を取って、そして老人デイサービスセンターで、今現在も働いています。色々そこでも自分の思い通りにならないことがたくさんあると思うんですが、だけど例えばね、「そのおかげで、自分の体を認識しながらできる限りのことを精一杯させていただいています。また利用者の方々と接する時に、いつも笑顔を忘れないように心がけています。すると、反対に私の方が励まされたり、パワーをもらっていることに気づかされます。仕事は大変だけど、決して嫌になることはなく、少々疲れていても仕事に行くのが楽しく思えてなりません。現在は母も同じ施設で働き、親子でがんばっています。今までどんな仕事も長続きしなかったけれど、この仕事を天職とし、焦らずに上を目指して行こうと思います」ということです。今現在もそこで頑張ってくれているんですが、彼が書いた詩がありますので、最後にそれを紹介したいと思います。詩集があるんですね。

「誕生日」

今日は僕の誕生日。おかんが僕をこの世に初めて送り出してくれた日。おめでとうと言われるんじゃなくて、生んでもらったお礼、育ててもらったお礼、ありがとうと言う日。だけどなかなか照れくさくて言えない。

「オカンへ」という詩もあります。

オカン、そんなに無理したらあかんで。仕事もほどほどにな。僕のことを気にせんと好きなことを一杯しいな。いつか僕が自立して一日も早くこう言えるようがんばるからな。それまで長生きしてや、オカン。

「普通」という詩もあります。

普通ってどう決めるの。今まで生きてきたけど、案外普通やったと思う。病気もして、障害者にもなったけど、それはそれ。太っていてもハンディがあっても、それはそれ。皆個性やと思う。僕にしてみれば、これが普通。普通が一番や。これからも普通に生きていきたいな。

それから、これは詩というか言葉ですね。「いつも忘れない、笑顔とありがとう」。

そうそう、「人間」と言う詩があります。

この世で一番賢い生き物、人間。この世で一番強い生き物、人間。この世で一番ずるくて、勝手に愚かな生き物、それも人間。そんな人間の僕。

「瞬間」という詩もあります。

シャボン玉はきれい。でもすぐに消えてしまう。お花もきれい。でも、すぐに枯れてしまう。人もええ時はほんの少し。そう長くは続かない。でも、その瞬間を大切に生きたい。思い切り生きたいな、思い切り。

「生きる」という詩は、

何にもできなくてもええ。生きてるだけでええ。生かされている、ただそれだけで、少しでも誰かの役に立てば、それでええ。いや、それが一番の幸せ。

「一生懸命」という詩は、

今、こうやって生かされている以上、何事も一生懸命。食べる時、働く時、遊ぶ時、怒る時、笑う時、そして寝る時も。後で後悔しないよう、この瞬間を一生懸命。

「今だけ」という詩もあります。

将来のことを考えると、悩んでしまう。明日のことを考えると悩んでしまう。今日のことを考えても、悩んでしまう。だったら、今、その時をどうすればいいのか。それだけを考えたら、悩んでいる暇もない。今その時どうするかによって先はどんどん変化する。今だけ、今だけ。

それから、「雨」という詩があります。

ある時は水害となって、いのちを奪う。ある時は恵みの水となっていのちを救う。ある時は、シトシトと、心を和ませる。また、ある時は雪に変身してしまう。何か人間によく似ている。

「おかげさま」という詩は、

今、こうやって生かされているのは、誰のおかげ。仏様、ご先祖様、両親、今までお世話になった学校の先生、病院の先生、友人、近所のオッチャン、オバチャン、動物や植物たち。これからも数え切れない力に支えられて生かされていく。おかげさま。

僕もこれからは、数え切れない誰かのおかげさまになりたいな。

「プレゼント」という詩があります。

僕が 12 歳の時に神様、仏様は、大きなプレゼントをくれた。脳腫瘍という病気と一緒に、新しいいのちを。体はあっちこっち不自由になったけど、その代わりにいろんな心をプレゼントしてくれた。感謝の心、思いやりの心、優しい心、そして誰もが経験できないような人生の特別コースまで。数え切れない出会い、感動。たくさんのプレゼントのおかげで今日まで生きてこれた。これからは自信を持って、なるべくプレゼントに頼らないでがんばって生きていけたらええな。

いくつも詩があるんですね。

もうこんなになったら最悪やと思うようなことが、君たちもいっぱいあると思います。自分にとって人生で一番辛いことが起こったと思う時に、そこにいっぱい学ぶことがあるし、そこにまた、今まで見たことがない幸せや喜びや感謝や手ごたえやそんなものがあるんですね。

今日午前中に物故者追弔法要がありまして、大谷にご縁の深い方々で、お亡くなりになられた方のご遺族が来られました。大谷高校に在学中に白血病で亡くなられた、床尾学君という方のお母さんが来られていました。その子のお焼香をしにですね。もう亡くなられて十八年になるんですね。亡くなられて十年は毎年来られていました。十年をきっかけに「来年からは、参りません」と仰っていたんですが、今年は久し振りに来られました。お母さんが自分の子供を失うというのは本当に辛いことですね。そのお母さんもその十年目の時に「涙が乾くのにな十年かかりました」ということを言っておられました。今日は「あの子があ瞬間から私を人間にしてくれた」ということで、学君というのが長男で、次男の弟さんがおられるんですが、命日にその息子と二人で「あなたは学から何をもらったの」と聞くと、二人が期せずして「人生だよな」みたいなことを話をしたんですと仰っていましたが、人生で一番辛いことがまた自分を本物にしてくれると言いますかね、自分の人生の意味とかをとことん考えさせてくれるということがあるのです。

私たちはどうしても、ちょっと挫折をするとやる気がなくなったり、ちょっと思った通りのことにならないと、投げやりになったりしがちです。それは自分の頭で考えてそうなんだけれども、もっと大きな世界では、どの人もどの瞬間も応援してもらっているんだということが、どこかできちんと腹に入れば変わります。つまり、皆さんの存在そのものが、いのちがまるごと、何の条件もつけずにちゃんと認められているんだということに安心ができれば、その上で、その自分をいい加減な状態に、自分でさせておいていいのかということですよ。自分に与えられた資質、能力、才能は、本当に存分に出さなければならないですね。仏様にあなたの人生は尊いと言われているんだから。その尊い人生をさらに尊くするにはどうすればいいのか。そういうことを考えながら生きていつてほしい。そのきっかけとなる報恩講になればと思ってお話をいたしました。以上です。

(40分)